

SDGs実現に向けたサステナブルデザインと産学公協働 ～ ブルー&グリーン アートプロジェクト2020における 服飾デザインを事例として～

Sustainable Design for realization of SDGs and Industry-academia-government
Collaboration - A Case Study of Works for Blue & Green Art Project 2020 -

水谷 由美子* 山口 光* 倉田 研治** 田村 奈美*** 山本 成美****
MIZUTANI Yumiko, YAMAGUCHI Hikaru, KURATA Kenji,
TAMURA Nami, YAMAMOTO Narumi

*山口県立大学大学院国際文化学研究科 教授 **同左准教授

同左2年生 *同左1年生

キーワード：

SDGs サステナブルデザイン 服飾デザイン 地域資源 産学公協働 ブルー&グリーン アートプロジェクト2020

Keywords : SDGs, Sustainable Design, Clothing Design, Regional Resources, Industry-academia-government
Collaboration, Blue & Green Art Project 2020

Summary

The Blue & Green Art Project was launched in 2020 as an attempt to achieve the Sustainable Development Goals (SDGs) adopted by the United Nations in 2015. On October 25th, the first project was held under the title of "Marriage between Land and Sea", and the importance of grasping the series of problems that are connected between the land and sea was discussed at the symposium. Also, a presentation was made about various conceptions of sustainable development through case studies of fashion shows.

This paper mainly focuses on "12. Responsible consumption and production", "14. Life below water", and "15. Life on land" among the 17 of the SDGs. The purpose is to use the knowledge gained at the symposium to examine the research design works that aimed to achieve sustainable development.

At the Super Global Fashion Workshop 2020, which is an event for international exchange of design works, direct exchange between participants became impossible due to the continued spread of the new coronavirus infection. Therefore, through online exchange with University of Lapland, ideas and design works were shared between the universities. The theme "What Happened in 2050?" presented by Professor Ana Nuutinen expands the dimension of using design to solve realistic problems, and it provided a valuable perspective of enabling speculative design to suggest future premonitions of design.

In addition, we introduced a mapping technique for excavation of local resources and storytelling. Furthermore, among the digital technologies advocated by Fab Labs, we introduced a stencil technique that utilizes a laser cutter. By using these technologies, we could attempt a new technique that fused clothing and textile design, which provided a valuable opportunity to expand the possibilities of expression through prototyping at the individual level (presented at Christmas Creation 2020, Yamaguchi City Hall). In the future, under the direction of sustainable thinking, the fusing of digital technology with fashion and textile design will give rise to awareness of the importance of creating new forms of expression through creative practice.

要旨

国連で2015年に採択された持続可能な開発目標（以下ではSDGsと言う）を実現する1つの試みとして、2020年度にブルー&グリーン アートプロジェクトを立ち上げた。10月25日に第1回のプロジェクトを「海と陸の結婚」と題して実施し、海と陸の問題を1連のものとしてとらえることの重要性についてシンポジウムで議論し、続くファッションショーを通じてサステナブルファッションの事例とそれぞれの考え方についてプレゼンテーションをした。

本論は、主にSDGsの17の開発目標の中で、「12.つくる責任 つかう責任」「14.海の豊かさを守ろう」「15.陸の豊かさを守ろう」に注目し、シンポジウムで得た知見を参考にして、サステナブルデザインを目指した企画デザイン研究室の作品について検証することを目的としている。

また、国際交流による作品制作の場であるスーパーグローバル・ファッションワークショップ2020は、新型コロナウイルス感染症の拡大が継続されたために、直接の交流は不可能となった。そこで、ラップランド大学とのオンライン交流を通じて、意見交換し作品制作を双方の大学で行なった。アナ・ヌウッティネン教授が提示したテーマ「2050年には何が起きたか？」の課題は、デザインが現実的な課題解決を行なうという次元を拡張し、スペキュラティブ・デザインが示唆する未来予想的なデザインを可能にする視点が提供されたことは有意義であった。

なお、地域資源の発掘とストーリー化についてマッピング技法を取り入れた。さらに、ファブラボが提唱するデジタル技術の中で、レーザーカッターを活用したステンシル技法を導入した。これらの技術を利用することから、服飾デザインとテキスタイルデザインを融合させた新たな手法に挑戦することで、個人レベルでのプロトタイピングの表現の可能性が格段に広がったことは有意義であった（クリスマスクリエーション2020、山口市民会館にて発表）今後、サステナブルな思考の元で、デジタル技術とファッション&テキスタイルデザインを融合させることで、さらに新しい表現を行なって行くことの重要性の認識と創作実践の課題が生まれた。

I 章 研究概要

1 研究背景

2015年に国連サミットで2030年の実現に向けて17の持続可能な開発目標Sustainable Development Goals（以下ではSDGsと記す）が採択された。2020年には外務省によって行動の10年と位置付けられ、日本でも多くの活動が行われてきている。デザイン領域でもサステナブルデザインが注目され、商品やサービスの開発だけでなく、福祉や医療領域への貢献が見られるようになってきた。

服飾デザインの領域では、地球環境や地域文化さらに民族文化などの課題解決に関心のある若手デザイナーたちが、まず先行してエシカルファッションに取り組んできた。個々のデザイナーの活動は1970年代以降、少しずつ始まっていた。プレタポルテやオートクチュールでは、各ブランドやデザイナーにとって、地球環境に配慮した態度をファッションで示すことがあたたかも義務のようになってきているのである。エコロ

ジー運動の中で取り組まれてはいた。しかしながらサステナブルな取り組みをしなければビジネスとして認められないなどの強制力が高まっているのが現状である。

ここ数年、ファッション雑誌が「サステナブル」をテーマに多くの特集が組まれている。

地球温暖化やプラスチックゴミによる海洋汚染および動物保護の問題は、世界レベルにおける解決すべき喫緊の課題となっている。ファッションデザイナーや経営者はいかに生産するかについて問われているのである。SDGsは社会、環境そして人間の調和ある世界の実現に向けた開発目標なのだ。

筆者はサステナブルデザインの先進国であるフィンランドのラップランド大学と2009年から共同研究を開始した。2013年頃からサービスデザインをファッションデザインに導入し、使い手（以下ではユーザーと言う）中心の考え方に基づくデザインUser-centered Designを目指してきた。同時に、作り手と受け手と

の共同的創造Co-creationを基本理念に据えるようになった。

2 陸の豊かさを守ろう

さらに、服飾デザインの視点から、地域創生や国際交流の活動を実施してきた。特に産学公の取組として、2013年から2019年まで、長門市や産業界の支援を受けて、山口県長門市油谷の棚田再生を目的として、アグリアート・フェスティバルと呼ばれるプロジェクトを行ってきた。そこでは産学公協働によるシンポジウムを通じた意見交換、芸術文化による課題の提案、さらに服飾デザインによる農業文化振興などの活動を行った。この活動は第25回全国棚田（千枚田）サミットが長門市で開催され、ここに合流して最後のパフォーマンスを終えた。

活性化の対象となった東後畑の棚田は、2019年にNPO法人ゆや棚田景観保存会が藪と化していた耕作放棄地を開墾し、ハーブ畑として蘇らせた。筆者の研究室も最初のハーブ植えに参加した。以後、ここで「陸」を守り再生する活動に継続的に関わって行くことにした。

3 海の豊かさを守ろう

2020年度は陸の問題から視点を海に向けた。山口県の海でも、マイクロプラスチックが環境に与える影響は課題となっている。油谷島の塩づくりをしている百姓庵の工場の近くでビーチクリーンを行い、課題を共有した。

スーザン・ロックフェラー（Susan Rockefeller 1959～）が作成した短編映画「Mission of Mermaid」に触発され、海洋プラスチックゴミの課題は、海洋に生きる生物や循環して影響を受ける人間の健康に負荷をかける重大でかつ喫緊の課題だと認識した。スーザンとデイヴィッド・ロックフェラー・ジュニア（David Rockefeller Jr 1941～）を講師に招いて講演会が計画されたが、新型コロナウイルスの拡大が治らないために延期されたことは残念である。

4 海と陸をつなぐ視点からの開発

「NPO法人森は海の恋人」の活動に詳しい安倍昭恵に聞くと、海の豊かさを守るために、漁師たちが森の木々の整備をしている⁽¹⁾。東日本大震災の時に、牡蠣の養殖がいち早く復興されたのも、その成果だという⁽²⁾。つまり里山と里海は一体として保全し開発して行く必要がある。

その後、周防大島のニホンアワサンゴが生息している海を守っている藤本正明⁽³⁾や油谷湾の海水で塩作りをしている井上雄然⁽⁴⁾に、それぞれ現地にてイン

タビューをした。その時に、皆が共通して海と陸を一体として守ることが海の生態系を豊かにするということを認識した。

5 つくる責任 つかう責任

デザイン領域からは産業側からのつくる責任が、消費者あるいは生活者側にはつかう責任が、SDGsで課題としてあげられている。

現在、ファッション領域では海洋プラスチックゴミが魚や動物、果ては人間の健康などにも大きな負荷をかけていることに注目が集まっており、プラスチックゴミ、特にペットボトルについての課題解決への取り組みが実践されている。

例えば、エコファーがある。イギリスのブランド jakke は動物保護の観点と、環境問題への解決として、ペットボトルからエコファーを作っている。かつてのフェイクファーは本物ではないというネガティブな意味があったが、エコファーという呼び方では、環境に良いファーを作っているという積極的な意味がある。

ペットボトルから服飾素材を作る点について、最も有名なものにはUNIQLOのフリースがある。また、ポリエステルのリサイクルのために新しく糸から生地を開発した事例としては、ISSEY MIYAKEの132 5(三宅一生がReality LABチームと取り組み2010年から発表されたブランド) が顕著な創作活動だと言える。3次元の服が2次元に畳まれる、ユニークな折り紙のような作品である。リサイクル生地ということの内包しつつも、全く新しいデザインのアイデアによって、どこにもないユニークな作品が生まれた。

回収された衣服やペットボトルから糸や繊維を作り、また衣服をつくるという循環型社会を実現する活動でリードしている日本環境設計株式会社がある。プラスチックの循環と再生には限度があったが、ここではプラスチックを科学的に分子の状態にまで完全に分解し、半永久的に何度でも再生できるケミカルサイクルという技術を開発している⁽⁵⁾。

技術開発と新しいデザインのアイデアで、捨てられてきた衣服やペットボトルが再生され、新たな価値を生み出している。こうした活動が人々にサステナブルなライフスタイルへの意識を高めるきっかけを与えると考えられる。

ここでは作る側の課題を対象としているので、つかう責任については別の場所で検討したい。

6 ブルー&グリーン アートプロジェクトの活動目的

SDGsでは「海の豊かさを守ろう」と「陸の豊かさを守ろう」は別々の課題として目標化されている。

ここでは海と陸を繋げることから海の豊かさそして陸の豊かさを守り、発展させることを服飾デザインで表現することを目的とする。

具体的には、ビーチクリーンにより海の実態を体験的に理解するとともに、海と陸の関係について、山口県内の状況をフィールドリサーチして、身近な自然の環境について把握することを目指す。

特に服飾デザインが表現しうる未来のライフスタイルと人々の共感が得られる新しい価値創造を目指すことを目的としている。地域資源としての伝統工芸、農業文化、オーガニックな衣や食のある生活および体験的に環境問題を考え、次世代の若者に伝えていくことをも目指す。

7 共同研究メンバーの役割分担

地域課題を発掘するための調査の一つとして、共同執筆者の倉田研治は地域資源を位置情報システムで可視化をそして山口光は服飾デザイン（テキスタイルデザインを含む）の可能性を拡大するためにデジタル工作機械の活用についてディレクションし、大学院生の田村奈美と山本成美が、サステナブルデザインの複数以上のアプローチを実践することを目指した。

また、筆者（水谷）は海と陸の結婚を表現するために、地域資源としての山口の固有の自然に注目し、テキスタイルデザインのディレクションをするとともに、服飾デザインに海と陸のスタイルの融合を目指す。

8 まとめ

以上の活動は、SDGs達成に向けて日本が果たす役割における「SDGsアクションプラン2020」のポイント（PDG 4頁）における「II.SDGsを原動力とした地方創生、強靱かつ環境に優しい魅力的なまちづくり」を目指す活動の一環とする⁽⁶⁾。（水谷）

II章 ブルー&グリーン アートプロジェクト2020におけるサステナブルデザイン

1 サステナブルデザインとしての服飾デザインと地域資源

ブルー&グリーン アートプロジェクト（以下BGAPと記す）は、産学公協働により開催されてきたアグリアート・フェスティバル（以下AAFと記す）（2013年～2019年）を継承、発展させることを目的として、2020年度から産学公協働で開始された。新しい取り組みのため、長門市は後援を通じて、協力をした。

サステナブルデザインを目指したプロジェクトとして、AAFと並行して、2017年からスーパーグローバルファッションワークショップ（SGFWS）を、海外

ゲストを招聘して開催してきた。ここでは、地域資源として徳地手漉き和紙（山口市徳地）、藍染め（防府市富海）、茜染（防府市野島）、柳井縞（柳井市）、玖珂縮（岩国市玖珂）、そしてデニムと加工（山口市）などを取り上げ、繰り返し作品を制作してきた。さらに、地域の自然、たとえば東後畑の棚田や元乃隅神社などの景観をフォトミュージックのソフトを用いて、作品のモチーフを制作してきた。

以上のように、今回のBGAPでも伝統的な草木染めや自然をモチーフとして取り上げている。また、素材も極力オーガニックなものを用いることである。（水谷）

2 山口の地域資源としてライフスタイルの現状把握、地理情報としての可視化（マッピング）

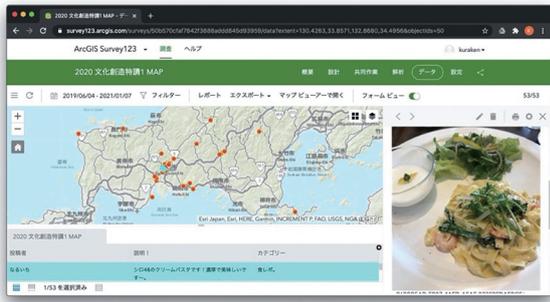
マッピングとは、地図作成、写像、対応付けなどの意味を持つ英単語である。ITの分野では、ある集合の要素を何らかの規則に基づいて別の集合や要素へ対応付けたり、字義通り、要素の分布や配置を地図などの上に図示することなどを意味する⁽⁷⁾。ここでは地図を意味する英語である「map」の現在進行形からきている「mapping」の通り、ある要素を地図上に位置付ける作業のことを指す。現在、「マッピング」についての論文は数多く存在するが、主に地図への位置付けを意味するマッピング手法は、情報化社会におけるシステムの円滑化へと応用されているようだ。この度は特定の項目についてマッピングし、そうして得られる効果を検証する。

使用したのは日本語に訳すと地理情報システム、GIS（Geographic Information Systemの略称）である。その中でもEsri（米国）製品の総販売代理店であるESRIジャパン株式会社の運用サービス、ArcGIS Survey123を使用した。GISでできることとして、情報の可視化、情報の関係性の把握、情報の統合と分析、データの作成や更新が挙げられる。また、メリットとしては、業務効率化によるコスト削減や、最適な意思決定、コミュニケーションの向上などが挙げられる。

GISはさまざまな表現方法（2D,3D）を用いて位置情報を地図上に可視化する。可視化された位置情報は状況を効果的に伝え、的確な理解を促すことができる。そのためグループや組織間、社会におけるコミュニケーションの向上を図ることができる⁽⁸⁾。

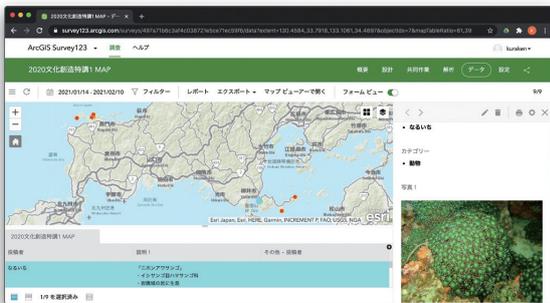
今回は、今までの大学院の受講者のデータに追加していく形で、県内の風景や食事を写真とコメントと共にArcGIS Survey123に投稿、マッピングした。こうして出来上がってきたマップには複数人によって投稿されたポイントが記された（写真1）。これはそれぞれが大切

にしているライフスタイルの一部であり、山口県の資源の再発見であると捉えられる。今回マッピングをしてみて、点在している地域資源をマッピングすることによって、収集したり、組み合わせたりもできるように感じた。また、学生達が新たな情報を加える形をとったことで、常に最新の情報を共有できるメリットも感じた。この度は、授業内でのデータ収集、共有であったが、今後は自身の研究を進めていく際に、技法に関する情報をまとめたり、制作物と、地域との関わりなども可視化していくことができるのではないかなと思う。



図版1 マッピングのスクリーンショット

BGAPの前のエクササイズとして上記のマッピングがあり、地域で守りたい自然や文化について長門市と周防大島町にて実施したものを次(図版2)に表す。(倉田)



図版2 山口の守りたい海や陸に関する情報のマッピング

3 服飾デザインにおけるサステナブルな天然素材

現在、アパレル業界の世界的な傾向として環境配慮型素材や社会的観点からのサステナブルな素材が求められるようになってきている。これは地球温暖化や海洋プラスチック問題など地球規模で起こっている環境問題が重要視されるようになった事や、2015年に国連で制定されたSDGsの目標実現のために多くの企業が環境や社会にとって持続可能な、サステナブルな商品の開発を目指すようになったからである。

ここでは、最終的に枯渇してしまう化石資源ではな

く、毎年収穫する事ができ、生分解性繊維である事、また地球温暖化の原因となる二酸化炭素を増やさないカーボンニュートラルといった視点からもサステナブルな素材である天然素材のオーガニックコットンと麻を取り上げる。

サステナブルな天然素材といえば、まずはオーガニックコットンが挙げられる。通常の綿花を育てる場合には化学肥料や防カビ剤、殺虫剤、落葉剤など多くの農薬などが使われており、世界中の耕作地における綿花畑は2.5%でしかないが、世界中で使用されている殺虫剤の16%、農薬全体の7%が綿花畑に使用されているという⁽⁹⁾。筆者は、5年前から有機栽培で綿花を育てている。芽が出るとナメクジが来る、成長すると葉巻虫が葉っぱに沢山ついてしまうなど、常に虫が寄ってくるのを実感しており、綿花は虫が沢山ついてしまう植物なのだ。そして、綿花自体は乾燥した場所でも栽培が可能な植物であるが、通常の綿花を栽培するには大量の水を必要とし、農薬や化学物質が水と共に流れ出て環境汚染に繋がってしまう。

オーガニックコットンであればこれらの環境汚染の原因となる農薬などの代わりにインドでは牛糞をもとにした肥料や、天然素材で作られた殺虫剤を使用する。綿花に害虫が付かないように周りにマリーゴールド等のコンパニオンプランツが植えられるなどの方法で育てられている。オーガニックコットンは環境に良く、また綿花畑で働く労働者の健康にも良いサステナブルな素材である。そして、オーガニックコットンのトレーサビリティのある世界認証はOCS (Organic Content Standard) や、労働環境や児童労働に対しても配慮されているGOTS (Global Organic Textile Standard) の認証がある。

衣服で使用される麻にはリネン(亜麻)とラミー(苧麻)がある。リネン(リネンの原材料としての植物はフラックス)は6~7年の輪作が必要だが、100日程度の短期間に80~120cmの大きさに成長し⁽¹⁰⁾、ラミーは年に栽培場所によるが3~5回の収穫ができ、150~200cmの大きさに成長する⁽¹¹⁾。どちらも肥料や農薬をほとんど必要とせず、使用する水の量も少なく、植物のすべての部分を使用できるという非常にサステナブルな素材と言える。オーガニックヘンプについてはGOTSが認証をしている。

筆者はアグリアート・フェスティバル2019でオーガニックコットン100%のワークウェア、BGAP2020ではリネン100%の生地を使用した服を草木染めで染め、サステナブルなファッションの創造を目指した。(田村)



写真1 オーガニックコットンのワーキングウェア



図版3 アワサングの夏の姿を加工したテキスタイル

4 地域資源とテキスタイル&服飾デザイン

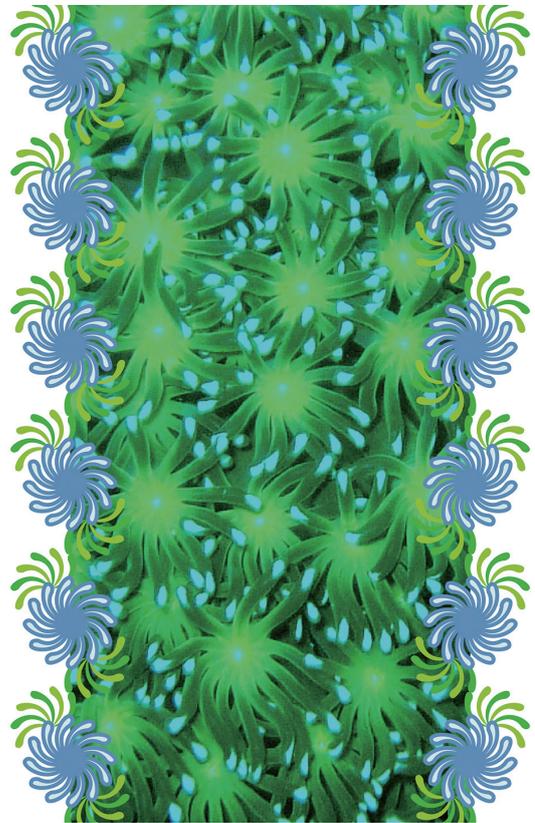
山口の守りたい自然の中で特に注目したもの一つに、周防大島町地家室沖に群生するニホンアワサングがあり、世界最大規模の広さを有している。筆者とアワサングとの初めての出会いは1枚のポスターであった。その美しい姿を見て、その存在の意味もわからず直感的に是非、服飾デザインに取り入れたいと考えた。

その後、本格的に取り組むために2020年8月に周防大島町に取材に出かけた。このポスターの写真を海中撮影した藤村正明に地家室沖を眺めながら説明を受けた。

この土地の環境がニホンアワサングに適しているからに違いないが、藤村は地家室の陸の環境が海の環境に影響をしているという考えのもと、陸地整備にも果敢に努力をしている旨の指摘があった。説明を受ける直前も山に入って作業をしていたようだ。

なぎさ水族館の学芸員の説明を受けて、ポスターで見た緑色の姿は冬のアワサングの姿であり、夏には卵を体内に孕むために赤くなることがわかった。

そこで、「海と陸の結婚」をテーマに、擬似的に花嫁と花婿のウエディングスタイルを制作ことにした。女性には赤い夏の姿、男性には冬の緑色の姿の写真を加工してオリジナルテキスタイルを制作した(図版3,4)。



図版4 アワサングの冬の姿を加工したテキスタイル



写真2-1 花嫁と花婿のウェディングスタイル

花嫁のスタイルの上衣のストマッカー（胸の装飾スタイル）にアワサンゴの夏のテキスタイルをあしらうことにした。パンツは会津若松で古くからモンペとともに野良着として着用されていたサルッパカマのスタイルを取り入れた。

花婿のスタイルには、上着はハワイ固有のアロハのモダンなスタイルを取り入れた。アロハの花柄などのモチーフの表現には、幾つかのスタイルがある。モチーフをバックのみに大きく配置するタイプ、総柄タイプ、そして前の中央に垂直に表現するなどである。ここでは全体を白色に統一しながら、ポイントにアワサンゴのモチーフを前の中央に表現することにした。

周防大島町は瀬戸内海のハワイと呼ばれており、6月から市役所や主だった機関の男性はアロハシャツを着ている。明治維新の頃から多くの住民がハワイに移住した歴史があり、カウアイ島と姉妹都市の提携を長年結び、交流が盛んだという背景がある。

パンツは花嫁と同様のサルッパカマとセーラーパンツのディテールを融合させた。ここでも海と陸の結婚を表現するというコンセプトである。ファッションにはスタイルのディテールの引用や融合によって、新しいメッセージを表現する可能性がある。

素材は花嫁の上衣は綿、ストマッカー部はポリエステル、赤の下衣部はシルクを用いた、パンツは綿の白デニムである。花婿の上衣のアロハシャツはポリエステル、下衣は花嫁と同様の白デニムを用いた。自然繊維を目指したが、オリジナルプリントを効果的に表現するためには、現状ではポリエステルを用いることが適切な方法であった。

この「海と陸の結婚」は、ブルー&グリーン アートプロジェクト2020では発表される前日10月24日に、韓国ファッションビジネス学会国際学会「AI時代のアートイノベーション ART INNOVATION IN ARTIFICIAL INTELLIGENCE」に招待され、デザイン画の審査を経て、オンライン展覧会で発表され、展覧会カタログに掲載された。なお、2020年12月11日～15日に開催されたYAMAGUCHI×FINLAND DESIGN EXHIBITIONにおいても展示された。

筆者はクリエイティブディレクターとしてコンセプトデザインとアートディレクションを担当し、田村未奈美（山口ファッション&テキスタイル研究所研究員）がコクリエイターとして、デザインとモデリングを担当した。また、テキスタイルデザインは山本成美が担当をした。（水谷）



写真2-2 東後畑（長門市湯谷）のコスモス畑にて

III章 国際交流を通じたワークショップ

1 ラップランド大学とのスーパーグローバル・ファッションワークショップ

フィンランド国立ラップランド大学では長年サステナブルデザインに取り組んでおり、人間中心設計Human-centered Designあるいは使用者中心設計User-centered Designの考え方が浸透し、研究が進んでいた。

特に2011年頃にはサービスデザイン概念を、芸術デザイン学部のみならず大学教育全体に敷衍するような教育改革が行なわれるほど、作り手中心から使い手中心の考え方へと大きな舵が切られた。サービスデザインの手法の1つとして、サービスイノベーションコーナーSINCOを構築し、アクティングアウト方式でプロトタイプングを行なっている。本学では、2013年からライフイノベーション研究チームを設置して、サービスデザインを医療分野と繋げて実践的な研究に取り組んだ。

2009年から2017年まではラップランド大学のマルヤッタ・ヘイッキラ＝ラスタス教授（現在名誉教授）との共同研究を継続する中で、サステナブルデザインを軸に、サービスデザインの手法も取り入れて、ワークショップを開催してきた。

ワークショップでは主にラップランド大学において筆者の研究室の学生と左記大学の学生および留学生とともに大学が位置するロバニエミ周辺（ラップ州）と山口のそれぞれの地域資源を融合させた作品を制作し、ファッションショーと展覧会で発表してきた。

また、2017年からは一般社団法人東芝国際交流財団の支援を受けて、ラップランド大学の学生を中心に、その他の国（フランス、中国、韓国、ハワイ等）の大学の学生や教員を招き、山口県立大学を拠点として、地域の伝統工芸等のアトリエなどでワークショップを実施し、アグリアート・フェスティバルのファッションショーにおいて発表してきた。

2020年度は新型コロナウイルスCOVID-19感染症の拡大が収まらないために、山口にラップランド大学からゲストを招くことが不可能だった。

そのために、オンラインにて研究内容やコンセプトなどの交換を行ない、それぞれで作品を制作することになった。

また、ヘイッキラ教授引退にともないアナ・ヌウッティネン教授との共同研究がはじまり、今年度は来日が難しいため、双方がそれぞれのテーマをオンラインで共有し、当研究室では以下の2節で記すような「海と生きる 陸と生きる」をテーマに地域資源である染織文化を活用し、戸外でのライフスタイルに適応する作品を創作した。

ヌウッティネン教授はファッションにおける未来予測的な研究が専門のために、「2050年に何が起きたか？」⁽⁸⁾をテーマにし、パネル作品を制作した。両者の作品は、クリスマスクリエーション2020と同時に開催された展覧会「YAMAGUCHI×FINLAND DESIGN EXHIBITION」（2020年12月11日～15日、山口市民会館展示ホール）において発表された。（水谷）

2 未来型ライフスタイルと地域伝統工芸に着想を得た作品（学部生の2組、4点）

今回は「海と生きる 陸と生きる」をテーマにワーキングウェアとレジャーウェアの2グループに分かれ、地域伝統工芸としての染めを使用した作品を制作した。今年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で海外を自由に行き来する事が困難なため、ラップランド大学の学生と共にZoomやメールにてやり取りを行い、ペルソナやデザインを決めて制作した。

（1）ワーキングウェアのグループ

制作者は角谷優華、藤本めぐみ、林于玲。作品名は「Indigo Hermoso」（インディゴ エルモソ）である。海でのワーキングウェアと藍染めをテーマに制作した。ペルソナは、夫婦で男性は長門市生まれで海洋高校出身の27歳、女性は下関市生まれで調理師専門学校出身の23歳。それぞれ東京で、男性はアパレル店、女性は飲食店で働いていた。東京で出会った二人は男性の地元の長門市で飲食店を経営しながら、漁師の仕事もしている。このワーキングウェアは、海の青から着想を得たこと、また、山口に藍染の文化があることから、ブルーデニムとホワイトデニムの生地などを藍染めにした。男性用のシャツは2回、ブルーデニムのパンツは4回、女性用のエプロンのホワイトデニムは3回、それぞれ藍染を行った。脱ぎ着しやすく、収納できるポケットがあり、汚れが目立たないなどの機能性を重視したことに加え、オシャレも楽しめるようなデザインにした。



写真3 BGAP2020藍染めのワーキングウェア「Indigo Hermoso」

(2) レジャーウェアのグループ

制作者は本田真悠・升田有紀・矢吹穂衣。作品名は「Blessing of land」（ブレッシングオブランド）である。グランピングでのレジャーウェアと紅茶染めをテーマに制作している。ペルソナは同じ下関の高校出身で、同窓会を機に再開した2人。お互いの趣味がグランピングであること、また環境問題に関心を寄せていたことから意気投合し、その後結婚。休日は、夫婦2人で趣味のグランピングを楽しみ、下関の自然を満喫している。このレジャーウェアは、夫婦がグランピングで自然を楽しむひとときを意識し制作している。妻が染物作家であるという設定から、草木染め的一种である「紅茶染め」を実践し、ナチュラルな優しい色合いの茶色に染めている。大人のグランピングにピッタリなヴィンテージ風の味のある雰囲気とシンプルなデザインによる上品な装いを表現している。



写真4 BGAP2020 紅茶染めのレジャーウェア「Blessing of land」

(3) 海のワーキング×レジャーウェア

2020年9月にゼミ生達は向津具半島（長門市）で塩づくりをしている「百姓庵」の工場そばにあるビーチで「百姓庵」の、井上雄然代表の指導の下、ビーチクリーンを行った。海での活動内容はビーチクリーン、レジャーはビーチクリーンと一緒にできるサーフィンとヨガにした。また、海洋プラスチック問題をテーマにし、藍染め、茜染め、玉ねぎ染めを行い制作した。制作者は田村奈美。作品名は「Sea Bubbles」「波のゆらぎ」の2点である。

作品「Sea Bubbles」のペルソナは、31歳の女性。宮崎

大学の工学部を卒業し、プログラマーとして働いている。大学時代の友達の影響で始めたサーフィンが好きで、職場で知り合った夫と週末はよく海に行っている。ビーチクリーン活動に参加した事でプラスチックゴミ問題に興味を持ち、実生活でもプラスチックをなるべく使わない脱プラスチック生活を実践している。サーフィン後のビーチクリーンを行う際の服として脱ぎ着しやすく、動きやすいデザインにしており、サンゴがマイクロプラスチックを食べて白化する問題をサンゴの柄で表現している。この柄はロウケツ染めでサンゴを描き、サンゴの柄の周辺のみ茜染めで部分的に赤く染めた後、藍染めで全体を染めている。

作品「波のゆらぎ」のペルソナは、32歳の女性。宮崎県立看護大学の看護学部を卒業し、看護師として働いている。休日は子供と夫と一緒に公園に出掛けたりしている。健康維持で始めたヨガにハマり、夫とはヨガを通じて知り合った。野外で行うビーチヨガの後にはビーチクリーン活動も行っており、日常では物を買すぎないミニマルな生活を目指している。服はビーチヨガ後のビーチクリーンを行う際の服として体を動かしやすいデザインにした。また、裾にスリットを入れて裾を結ぶことができるようにし、歩きやすくした。海の波や浮遊物を玉ねぎ染めの絞り染めで表現した。今年の春に植え、夏から秋にかけて収穫した藍の乾燥葉で全体に藍染めをしている。制作にあたり、SDGsの目標を考慮し、布は2点とも生分解性のある天然素材の麻100%の布を使用した。肌と環境の両方に優しい草木染めで染めた作品にしている。(田村)



写真5 BGAP2020 ワーキング×レジャーウェア

(4) 農作業着×プリントデザイン

制作者は山本成美。作品名は「Saaret (サーレット) (鳥々)」「Kukka sepele (クッカ セッペレ) (草花のリース)」「Verenkierto (ヴェレンキエルト) (循環)」の3点である。テキスタイル名がそのまま作品名になっている。

ペルソナは29歳の女性。名前は磯崎千紗 (いしざき ちさ)。鹿児島県に生まれ、大学時代は兵庫県にて環境デザインや古い建築物のリノベーションなどについて学んだ。現在は夫の転勤に伴い秋田県へと移住してきた。ここでは主に夫の両親の米作りの手伝いや、自身で楽しんでいる野菜などの収穫を想定した農作業着を制作した。全ての作品に、自然界から着想を得たオリジナルな柄のテキスタイルを使用している。作品「Saaret」は食事の準備中に、気軽に野菜を収穫することを想定したエプロンである。巻きスカートのようにおしりの隠れるデザインにした。また、収穫用のハサミや小さな袋などを取り付けられるように、カラビナを腰回りにあしらった。作品「Kukka sepele」は、農業にはかかせない作業である草刈りのための作業着である。草刈り機との摩擦や草の飛び散りなどで汚れやすい腰回りに撥水素材を使用している。トップスはポケット付きで、モンペと同じ生地柄を採用した。作品「Verenkierto」は、スタンダードな農作業着として制作した。最大のデザインのポイントは、農作業着の基本的な機能である、絞った袖口を採用している点である。一見ストレートで普段着のような袖に仕上げているが、これはフェイクで、内側にはゴムが入り手首ちょうどくらいに絞られている。ズボンの裾も同様に、絞ることも、ストレートにして履きこなすこともできる仕様になっている。(山本)



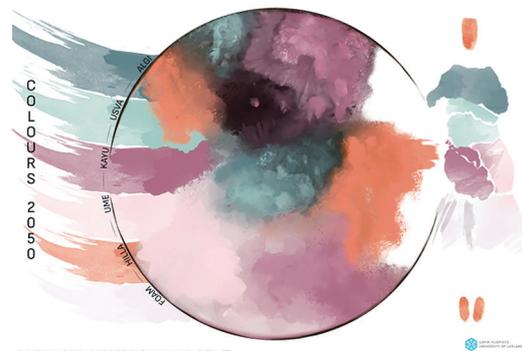
写真6 BGAP2020 農作業着×プリントデザイン

3 ラップランド大学テーマ「2050年に何が起きたか？」

ラップランド大学のアナ・ヌウッティネン教授 (ファッションデザイン領域) とヘイディ・ピエタリネン教授 (テキスタイルデザイン領域) がディレクションし、ラップランド大学学生 Sara Aarni, Silvia Jurvansuu, Sini Karjalainen, Inkeri Kylämäki, Ella Kärkkäinen, Tiina Lamminen, Jasmin Luttamus, Essi Moilanen がワークショップメンバーとして参加した。作品はストーリーボード (図版5)、カラーボード (図版6)、マテリアルボード (図版7) ムードボード (図版8)、服飾デザインボード (図版9)、で構成されている。



図版5 ストーリーボード



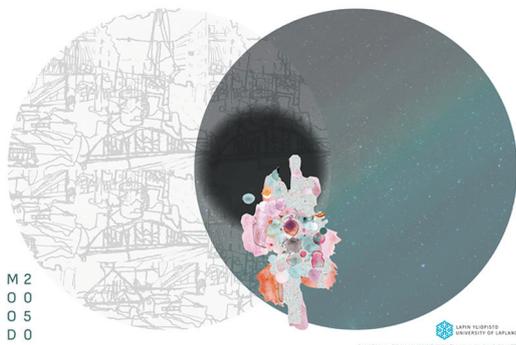
図版6 カラーボード



図版7 マテリアルボード



図版8 ムードボード



図版9 服飾デザインボード

2050年という今から30年後の世界を現状にある芽を情報収集し、判断して未来トレンドとして読み取って行くという手法を用いている。従来の課題解決型のデザインシンキングとは異なり、未来予測的なスペキュラティブ・デザイン⁽¹³⁾のデザインの姿勢からのアプローチが見られる。

具体的なケースの中でのステークホルダー設定、ペルソナ設定という手法が、一定の現実的な条件内で行なうことによる限界をもっていることは事実である。デザインを志す若者にとって、未来を思索し推測して行く発想法によって、自由にアイデアを出して行くことが可能であり、新しい刺激となる。

サステナブルデザインはスペキュラティブ・デザインのデザイン態度を適応することから、ステレオタイプに陥らない斬新な未来のライフスタイルを創造する可能性があるのではないかと考える。(水谷)

IV章 オリジナルテキストのためのデジタル工作機械の活用

1 ファブラボとは

ファブラボ (Fab Lab) とは3Dプリンターやレーザーカッター、各種プリンターなどのデジタル工作機械を備えたオープン工房のことである。2002年に

マサチューセッツ工科大学メディアラボのニール・ガーシェンフェルド教授の下で始まり、令和3年1月現在、世界中1700カ所以上に広がっている⁽¹⁴⁾。一般家庭では簡単に手にすることのできない機器を誰もが使用できる環境が地域に入り込むことで、モノづくりは趣味の段階から一歩抜き出て、クオリティの向上を求めることができる。また日本では2012年にFab Cafe Tokyo がオープンし、そのメニューにはフードやドリンクに並んで様々な機器が並んでいる⁽¹⁵⁾。

こうした手づくり×デジタル工作機器は発展を続け、手作業では叶わない表現を助けている。そんなファブラボが山口県にも存在する。2015年2月、ファブラボ鎌倉のサポートを受けて「期間限定FabLab Yamaguchi」として24日間の試験運用を実施した。同年6月、「FabLab Yamaguchi β」として再始動した。同年9月20日、山口情報芸術センター (YCAM) で開催されたイベント「Yamaguchi Mini Maker Fair」に出展したことを機に、「FabLab Yamaguchi」が正式にオープンした⁽¹⁶⁾。

2015年当初は山口市の中心商店街にラボを構えていたが、現在は大殿大路という古き良き街並みの中にも場所を移して活動中である。近隣の大学生が訪ねて卒業制作を行ったり、市民の方々の創作、さらにプロのデザイナーのコミュニケーションの場としても大いに力を発揮しているようだ。

山口県立大学では2016年から同様の設備を導入している。(山口・山本)

2 ステンシルの型制作とデジタル工作機械

クリスマスクリエーション2020では新しい試みとしてPodea社製のPodea ZERO Corsaレーザーカッターを使用し、ボタンとステンシル用の木型を作った。

ボタンの制作は田村奈美の作品に使用した。レーザーカッターは素材の表面に模様を付ける彫刻と素材を切るという2つの方法がある。ボタンの制作方法はまず、イラストレーターで模様や形を彫刻の部分とカット部分に分けてデザインを描き、パソコンに取り込む。そして、レーザーカッターで用意した素材にイラストレーターで描いたデザインを彫刻し、ボタン穴を空けてボタンの形をカットする(写真7)。模様のあるボタンは彫刻とカットと2回のレーザーカッターを使う必要がある。今回はボタン穴を囲むように英字の作品名を配置し、直線を組み合わせたデザインを描いた。ボタンの素材はその使用目的や使いやすさ、染めを行う事から木材を選んだ。ボタンは大きさが小さく、繊細な模様であることから薄い木の板を使用して作ったため、

2枚を重ねる事で強度を付けた。また、茜染めで赤く染める際に、3時間程度染め液に浸していたが、布と違って木はあまり濃い色には染まらず、薄い赤色に染まった(写真8)。さらに、カットはあまり時間がかからなかったが、彫刻には時間がかかり、ボタン1個を制作するのに30分程度の時間がかかった。



写真7 レーザーカッターで製作したボタン



写真8 茜染めで染めたボタン

ステンシル用の木型は田村奈美、山本成美の作品に使用した。素材に木材を選んだのは、何度も使用するには紙では耐久性に乏しい事、染め液で布に描く際に木材のようなしっかりした型の方がにじみが少ない事、環境に配慮した生分解性のある素材であるという理由からである。ステンシル用の木型もボタンと同様にイラストレーターで模様を描き、レーザーカッターで木の板をカットして制作した(写真9)。最初はひとつの大きなデザインを考えていたが、レーザーカッターで最大にカットできる木型の大きさが縦40cm×横60cmであった。そのままの大きさのデザインの木型を制作するには模様をいくつかに分割して作らなければならないが、制作時間がかかりかかってしまう事から、ひとつの連続した模様をいくつも描く事ができるデザインに変更し、カットする木型の枚数を減らすことにした(図版10)。ステンシル用の木型はデザインの色ごとに木型を制作し、いくつかの木型を重ね合わせる事でひとつの模様ができるようにした。

そうする事で色が混ざることなく、それぞれの色のデザインを綺麗に描く事ができた。



写真9 レーザーカッターで木型を制作する様子



図版10 木型のデザイン

レーザーカッターでのボタンや木型の制作は手作業と違って誰でも思い通りの模様や形を綺麗に短時間でカットできる事が最大の利点である。同じものを手作業で制作するには何年も技術を学んだ職人さんにしか出来ない。また、作品に新しい技術を取り入れる事によってより深みのある作品に仕上がった。(山口・田村)

3 布用プリンタによる表現

(1) 概要

近年、プリント技術は著しく発展し、私たちの生活に柔軟に対応している。その中でも生地への印刷がより容易に、身近なものになってきた。これまで、布へのプリント技術としては、主に転写、インクジェット、シルクスクリーン、抜染プリントなどが用いられてきたが、中でも紙へのプリントと同じように図柄を再現するインクジェットプリントが発展を見せている。インクジェットプリントには版が不要で、小ロットの製作が可能であり、プリント可能な素材は綿だけでなく、絹やその他特殊繊維にも対応してきている。また、サイズの小さい機器であれば30万円程度で購入することもでき、世界のファブラボや、芸術系大学にも急速に

普及している。こうした布用プリンターの発展は私たちの生活をより自由に、自分らしくカスタマイズしていくことを可能にする。用途に合わせて小ロットで生産でき、様々なサイズでのプリント、カラー展開などが容易に行える。ここではこれらの特性を活かして、プリント生地を作成し、服飾作品の提案を行う。

陸のワーキングウェアとして、プリント生地を用いた農作業着3点を制作した。プリント作成方法として自然との共創を表現するようなスケッチのスキャン、トレース、着色を経てデータに起こした。

(2) 「Saaret (島々)」

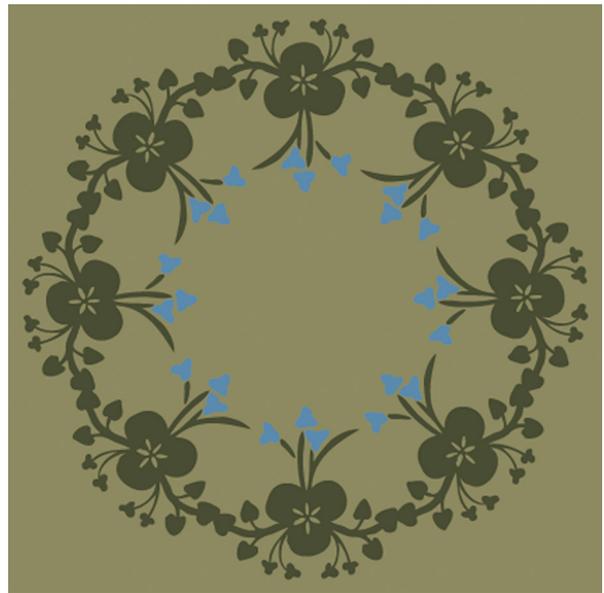
長門を訪れた際に目にした海の風景のスケッチからテキスタイルをデザインし(図版11)、軽作業を想定したエプロンとバンダナを制作した。バンダナには周囲に縁をつけたため、バンダナのためのデータを制作したが、画面上で容易に柄が配置でき、印刷サイズも希望のものを選択できた。



図版11 テキスタイルデザイン「Saaret (島々)」

(3) 「Kukka seppele (草花のリース)」

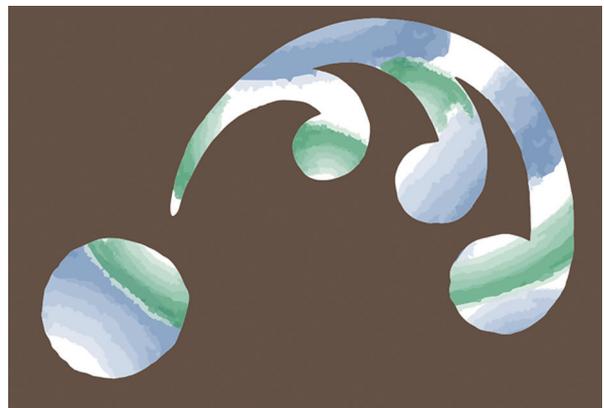
当研究室で栽培している日本茜の成長の様子や、同じ土地に育つ草花を描いた作品(図版12)。スタンダードな農作業着を意識し、モンベと、草刈りのためのトップス、日よけ用の帽子に生地を使用した。この作品では、容易なサイズ変更により、モンベと帽子では、かなり柄の大きさが違い、同じ柄にも関わらず、印象を変えることができた。



図版12 テキスタイルデザイン 「Kukka seppele (草花のリース)」

(4) 「Verenkierto (循環)」

こちらの作品もセットアップ部分と帽子のリボンとは、異なるサイズ、生地にプリントしたものを用いている。この作品はベタではなく水彩のような着色を目指してデータの作成を行った(図版13)。繊細なプリント技術によって実現している。



図版13 テキスタイルデザイン 「Verenkierto (循環)」

(5) まとめ

インクジェットプリントの場合、ロットによる価格の変動がないため、どの作品も必要な分量だけ、プリントし使用することができた。また、容易にオリジナルな柄の布地が作成できるため、商品化の際には大量生産ではなく、顧客の需要に応えた製品の実現が可能であると考えられる。こうした必要な分だけをプリントするという方法は、残り布という無駄を減らすことができる。持続可能な社会生活の実現に向けてこの方法の活用が期待される。(山本)

V章 農業振興と農作業着の商品開発

1 開発の背景

2005年頃から企画デザイン研究室では、ルーラルファッションをテーマに、モンペに着想を得た戶外生活用のモンペ・ヌーヴォーを、山口県立大学発ベンチャー企業である有限会社ナルナセバと共同開発した。

この時は、山口市仁保地域の農業者の女性にインタビューした結果、モンペが今日でも非常に快適な履物であることが理解された。その後、田園風のライフスタイルを創造する活動として、山口県立美術館と共同で「アグリアート・ツーリズム」のプロジェクトを山口市中心商店街のアーケード街にある米屋町商店街のストリートで2006年に実施した。

その後、2011年に起きた東日本大震災によって農業の大切さを認識することになった。特に、研究室では2006年から共同研究をしている安倍昭恵前内閣総理大臣夫人との話し合いで、若い女性向けの農作業着を開発しようという話しが持ち上がった。

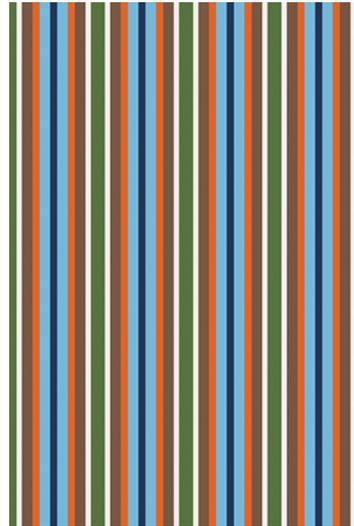
準備期間を経て2013年から開発研究が始まり、グローバル・モンペッコを開発したことが最初である。その後、2014年開発のモンペッコから、有限会社ナルナセバ（山口市、通信販売を含む）や長門市内さらに日本百貨店（東京）やA新聞社の通信販売などで販売活動を行い、マーケティングの研究を行い、次年度の開発にその成果を反映させてきた。

その途中で、サロベット風のsalopekko、ツナギ風のtsunagikkoなどの開発も行なってきた。そこで、今年度はmompekkkoのように定番になるような作業着としての上着の必要性があり、スモックから着想を得たsumokukkoを開発した。さらに、新型コロナウイルス感染症の拡大で、マスクが必須アイテムとなっているため、抗菌作用を付加したmasukukkoを開発した。

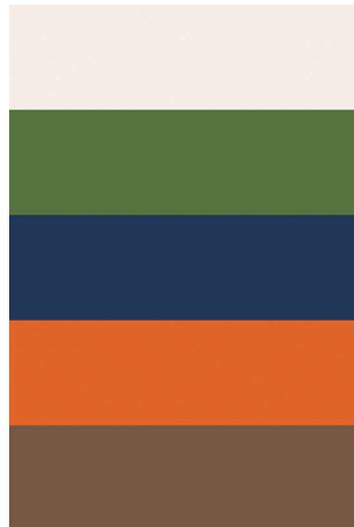
これらは、ブルー&グリーン アートプロジェクト2020およびYAMAGUCHI×FINLAND DESIGN EXHIBITION 2020においても展示された。以下に開発の詳細について述べる。(水谷)

2 mompekkko2020

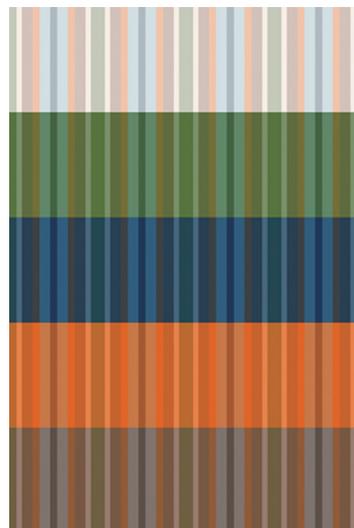
今年度の mompekkko は mompekkko earth と題し、大自然とのクリエイションをコンセプトに制作した。共通の経糸を用い、緯糸の変化によって5色展開となっている。経糸では長門の棚田や陽と海の響き合いを表現するべく、目に映る風景を参考に配置した。微妙な線幅や配色の順序は、共同開発者である安倍昭恵前内閣総理大臣夫人ともミーティングをし、決定に



図版14 monpekkko2020 経糸



図版15 緯糸原色



図版16 出来上がリイメージ

至った。緯糸では大地や土を表す茶色、エネルギーな太陽の朱色、深い海を表す藍色、森や植物の緑、キラキラと輝く光を表す白色、をそれぞれ表現した(図版14)。

自然の色を参照した今回の配色は、モンペ本来の用途である農作業着において、大地との一体化を感じることのできるものとなっている(図版15、図版16)。また、海でのレジャーや海岸清掃などのワーキングウェアとしても提案したい。生地は織元と縫製は毎年依頼している福岡県三井郡大刀洗町にある合資会社ロォーリングである。ここでは水谷がクリエイティブディレクターを、山本がテキスタイルデザインリーダーをした。(山本)

3 sumokukko 2020

農作業着の上着として参考にするべきものとしては、西欧のスモックがある。日本ではスモックは幼稚園児の制服で知られているものだが、服飾史においては諸説あるが、ここでは18世紀以降のヨーロッパ各地の農業労働者や羊飼いが着ていたスモックフロックの略語⁽¹⁷⁾として定義する。保温と、よごれを防ぐため、日常服の上から重ねて着たもので、膝丈、長袖、胸部にはスモッキングが施されて、胸下から膝に向けてゆとりをもたせている。今日では、ゆったりとした上着を指しており、ヨークの部分にスモッキング⁽¹⁸⁾は見られない。特に画家、エンジニア、夫人および子供の作業着がスモックとして見なされている。

そこで、ゆったりとして身体の動きをサポートし、うつむいたり跪いたりする農作業に邪魔にならないように、ミドルヒップ下くらいの長さのスモック風の上着を構想した。下に来ているものとのコーディネートを考える必要がないように、スタンドカラー付きにして、袖口は作業時に上に上げられるようにゴムを施した。特徴としては田園の自然の中で、作業する人と姿が浮かびあがるとともに、明るく楽しいイメージを表現するために、マリメッコのテキスタイルを前身頃のヨーク部分とポケットに使用した。このポケットはそれ自体で独立していて、脇で縫い留められているが、身頃には浮いていて、先が紐で身頃に留められているデザインになっている。遊び感覚でポケットを楽しむようにしたものである。(水谷)

4 masukukko 2020

昨今の新型コロナウイルスが蔓延している状況から日常的にマスクを着ける事となり、今年はmompekkkoの布を使用したマスクを制作する事となった。また、感染を予防するというマスクの使用用途から、抗菌

作用などの要素を付随した高性能マスクを制作することにした。そこで今回、株式会社エムロード(広島県福山市)の協力を得て同社の製品、「FUSEGU(ふせぐ)」に使用しているハイブリッド触媒加工をmompekkkoの布に施した。ハイブリッド触媒加工とは布に付着したウイルス・菌・汚れ・匂いなどの有害物質を分解・増殖抑制をする効果のある加工方法で、副作用がなく、日本アトピー協会からの推奨も受けている。また、常温で溶けたり、蒸発してなくなる事がないので洗濯しても効果が長続きする高機能を持った加工方法である⁽¹⁹⁾。

マスクは外側にmompekkkoの布、内側に綿100%のガーゼを使用し、装着した際に顔にフィットするような形のデザインにした。BGAP2020のモデルさんや有限会社ナルナセバで販売した際に購入した方々より、mompekkkoの5色の布を使用することで好きな色を選ぶことができ、着け心地も良いと好評を頂いた。(田村)

VI章 まとめ

2013年から長門市油谷の棚田をフィールドとして、アグリアート・フェスティバルを実施してきた。2019年の棚田サミットを機会に、対象とした東後畑の棚田で藪と化していた休耕田の開墾が始まった。NPO法人ゆや棚田景観保存会が産業活動として本格的に動き出した結果である。2020年までの2年間の間に、棚田はハーブ畑となり、コスモス畑もできた。そして1週末に300名ほどが来場するまでの観光のデスティネーションにまで棚田の活性化が行なわれた。

我々は産学公協働による棚田の現状の発表、課題解決に向けた議論をするシンポジウムの開催、さらに農業文化の推進や農業への訴求性を高めるためのファッションショーや商品開発を、国際交流による創作を含めて実施してきた。

この活動の延長線として、新たにブルー&グリーンアートプロジェクトを立ち上げた。その1回目のショーで上記NPOとの協働が実った。本論で示したように、コスモス畑の中に白い舞台が作られていたのだ。2013年に夢想したことが現実となった。会場として予定していた旧文洋小学校の教室の他、天気にも恵まれてコスモス畑がもう一つの発表の場になった。長年、長門市と田植や稲刈りをしてきたが、地域の産業界との美しい協働が実ったことは、1つの成果だと評価できる。

また、百姓庵のスタッフとともにピーチクリーンを

実施して、海の豊かさは陸の的確な手入れをすることで確保されることなど、塩作りをしている井上雄然代表取締役から講義を聴いた。目の前に広がる海となどらかな緑茂る大地を見ながら、新たな知見を得たことは、より強くこの考えを確かな課題とした。

また、デジタル技術を導入して、テキスタイルとファッションデザインを融合させた作品制作を行なった。コンセプトはサステナブルだが、実現する技法にデジタル技術を応用することから、個人のプロトタイプングの可能性が広がることが実感させられた。

今後、地域故の地理的限界を越えた表現を追求し、新たな表現の可能性を追求して行くことが課題である。さらに、守りたい海や陸における地域固有のものをファッションやテキスタイルデザインを通じて発信して行き、地域活性化について意識を高めるきっかけ作りにも貢献していきたいと考える。(水谷)

謝辞

ブルー&グリーン アートプロジェクト2020に係ったすべての方々にお礼を申し上げます。特に顧問であり共同研究者である安倍昭恵前内閣総理大臣安倍晋三夫人、運営に尽力頂いた公立大学法人山口県立大学前川剛志理事長、同河村邦彦事務局長また、周防大島のニホンアワサング調査に協力をした柳居俊学山口県議会議員、ライブ配信に携わったTYSビジョン株式会社、トヨタ自動車株式会社、ニホンアワサング写真提供の藤本正明保護活動家、他周防大島の皆様、NPO法人ゆや棚田景観保存会の皆様、長門市の皆様、ラップランド大学の皆様、mompeikko、sumokukko、masukukko共同開発の有限会社ナルナセバ、mompeikko生地開発、縫製等の合資会社ローリング、ハイブリッド触媒加工に関して石津和也MaG合同展示会主催、株式会社archis、モデルやスタッフの皆様、英語サマリー翻訳に関して監修をしたスワソン・マーク講師その他お名前を出せませんが、多くの皆様にご協力を頂きました。この場をお借りして心からお礼を申し上げます。

今回の作品はブルー&グリーン アートプロジェクト2020とクリスマスクリエーション2020で発表され、それぞれライブ配信を行いました。Youtubeを参照下さい。

・『「海と陸の結婚」ブルー&グリーン アートプロジェクト Blue & Green Art Project 2020』
<https://www.youtube.com/watch?v=aV4pJnutBqw>

・『デニムファッションデザインコンテストin Yamaguchi Xmas 2020 山口県立大学企画デザイン研究室コレクション』
<https://www.youtube.com/watch?v=YRvXiLZA7Cw&t=2411s>

注

(1) 2020年1月25・26日(土・日)「自由律茶の湯～野点ピクニック～守破離2020」防府市アスピラートにてインタビュー

(2) 畠山 重篤 『森は海の恋人』 文集文庫、2006年。

(3) 2020年8月27日(木)周防大島町地家室にてインタビュー

(4) 2020年9月15日(火)油谷島ビーチクリーン活動にてインタビュー

(5) 堅達京子+NHK BS1スペシャル取材班 『脱プラスチックへの挑戦 持続可能な地球と世界ビジネスの潮流』、山と溪谷社、2020年、P126。

(6) SDGsとは?「外務省」
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html> 2021年1月5日取得。

基礎資料:SDGsの概要および達成に向けた日本の取組(PDF)「外務省」

https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/sdgs_gaiyou_202009.pdf 2020年12月31日取得

「普遍性」「包括性」「参画性」「統括性」「透明性」持続可能な開発目標(SDGs)達成に向けて日本が果たす役割における「SDGsアクションプラン2020」のポイント(PDG4頁) II.SDGsを原動力とした地方創生、強靱かつ環境に優しい魅力的なまちづくり 2021年1月5日取得。

(7) マッピング「IT用語辞典e-Words,」
<https://e-words.jp/w/.html>, 2021年1月6日取得

(8) GISとは「esriジャパン」
<https://www.esri.com/getting-started/what-is-gis/> .esri ,
<https://www.esri.com/en-us/home> 2021年1月5日取得。

(9) どうしてオーガニックコットン!?「日本オーガニックコットン協会」
<http://joca.gr.jp/main/why-organic-cotton/#fb0=5>
2021年1月4日。

(10) 麻の基本知識:リネンについて「日本麻紡績協会」
<https://asabo.jp/knowledge/linen/> 2021年1月5日

(11) 麻の基本知識:ラミーについて「日本麻紡績協会」
<https://asabo.jp/knowledge/ramie/> 2021年1

月5日取得。

(12) 本文3章-3参照

(13) アンソニー・ダン、フィオナ・レイビー共著
久保田晃弘監修 千葉敏生訳 『スペキュラティブ・
デザイン 問題解決から、問題提起へ。 — 未来を
思索するためにデザインができること』 ビー・エ
ス・エヌ新社、2015年。

(14) FAB LAB NETWORK ‘Fabfoundation’
<https://fabfoundation.org> 2021年1月5日取得。

(15) Fab Service ‘fab café Tokyo’ <https://fabcafe.com/jp/tokyo/2021年1月5日取得>。

(16) Fab Lab Yamaguchi「株式会社アワセルブ
ス」<https://ourselves.jp/project/fablabyamaguchi/>
,2021年1月5日取得。

(17) smock。石山彰編『服飾辞典』ダヴィット社、
1972年、409項。
スモック「コトバンク：ブリタニカ国際大百科事典
小項目事典ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典」
<https://kotobank.jp/word/%E3%82%B9%E3%83%A2%E3%83%83%E3%82%AF-85078> 2021年1月5日取得。

(18) スモッキングとは主にスモックのヨーク部分に
プリーツを作り、それらを固定する刺しゅう技法を指
す。

(19) REPELLENT TECHNOLOGY「防ぐ」の
革命的新技術「FUSEGU+」<https://fusegu.jp/technology/> 2021年1月5日取得

参考資料

スーパーグローバル・ファッションワークショップ
におけるラップランド大学からの提案資料

図版5 ストーリーボードの紹介と翻訳
What happened in the year 2050?

The year 2050 was a year of change, when technology was applied to resolve worldwide issues and to make everyday life easier.

One of the most notable events in Finland’s internal politics was the rise in the amount of minority representatives in the government, which helped the minority groups get their voices heard among the decision makers. The effects of global politics were also seen in Finland, as there was a shift in economic powerhouses before the year 2050, as the United States suddenly fell behind India as a global economic influencer, partly due to India’s new inno-

vations in space technology. As a result of this technological advancement, the year of 2050 was marked by the many internationally signed contracts in order to help resolve environmental matters and also to ensure the free application of the new innovations to advance fields such as healthcare.

There was discourse about the development of AI, as the space technology’s advanced Alternate Intelligence started to slip into everyday use. AI was a cause for some concern as it was implemented more and more into social media channels, making it increasingly difficult for social media users to differentiate AI from a real person. Regardless, social media continued to be an integral part of modern societies, as around 80 % of the world’s population was actively using it in the year 2050.

In Finland, the government set out to ensure a larger sum of basic social security to its citizens, as the difference in income gradually steadied. As a result, people were more able to make environmentally sustainable choices in every day purchases, and citizens were more inclined to take advantage of mental healthcare resources as a precautionary method. Better financial stability also showed positive results in the increased living standards for the elderly, as they were better prepared to invest in assisting technology, making the average age of elderly ending up in retirement homes go up by 15 years in comparison to the year 2020.

The advertisements in technology were seen in the textile and clothing industries as well. Consumers were able to dye their own textiles and clothing, using plant dyes and applying the social media’s “Do it yourself in a petri dish” –methods making individuality one of the keywords for the year’s trends. Similar themes were seen in the shapes and forms of street wear, as there was no single clear fashion trend visible, with different silhouettes of self-expression. The materials used ranged from cellulose fibres to hologram like smart materials, giving us a glimpse of future possibilities.

The overall mood of the year 2050 was a wholeness made from differences, a mosaic that told a story about the environment, individuality, and open-mindedness.

「2050年には何が起こったのだろうか？」

2050年は、世界的な問題を解決し、日々の生活を楽にするためにテクノロジーが適用された、変化の年であった。

フィンランドの内政の中で最も注目すべき出来事の一つは、政府内のマイノリティ議員数の増加である。これにより、政府の決定権者の中でマイノリティグループの意見が聞き入れられるようになったのであった。また、世界政治の影響はフィンランドでも見られた。インドによる新しい宇宙技術の開発が一因となったこともあり、世界経済の影響力保持者であったアメリカが、突如インドに遅れを取ったため、2050年以前に経済大国が変わったのである。技術の進歩の結果、環境問題の解決の手助けや、ヘルスケアなどの分野で進展する新しいイノベーションの無料適用を確実にするための国際的に署名された多くの契約によって2050年は特徴づけられた。

宇宙技術の高度な代替知能 (Alternate Intelligence) が日常的に使用されるようになり、AIの開発について議論が起こった。ソーシャルメディアユーザーがAIを実在の人物と区別することがしだいに困難となり、AIが益々ソーシャルメディア上で使われることが懸念される原因となったのである。それにもかかわらず、ソーシャルメディアは現代社会に必須の部分としてあり続け、2050年には世界の人口の約80%が使用するようになった。

フィンランドでは、市民へ多額の基本的社会保障制度の確保に政府が着手し、所得の差が徐々に安定した。その結果、人びとは日々の買い物でより環境に持続可能な選択ができるようになり、市民は予防的方法として更にメンタルヘルスケアの資源を利用しようとするようになった。老人ホームに入る高齢者の平均年齢は2020年と比べて15歳も上がり、より良い財政の安定性は、高齢者の生活水準の向上にも肯定的な結果を表し、また、技術支援への投資の準備を整えた。

テクノロジーの広告が織物産業や衣料品産業の間でも見られるようになった。植物染料の使用や、この年のトレンドの一つになった個性を作り出す方法である「ペトリ皿を用いたDIY (Do It Yourself)」を利用しながら、消費者は自分で布や服を染めることができたようになった。ストリートウェアの形にも同様の趣向が見られ、様々な自己表現のシルエットと共に、目に見える明確なファッショントレンドはなくなった。使用される素材はセルロース繊維からホログラムのよ

うな知的材料まで多岐に及び、未来の可能性への光をもたらした。

2050年の全体的なムードは、違いから生まれた全体性、環境について説かれたモザイク、個性、そして偏見のない広い心であった。

(翻訳 山口県立大学 国際文化学部 国際文化学科4年 稲葉皐 監修 ウィルソン・エイミー教授/スワンソン・マーク講師)

以下に付録として、ブルー&グリーン アートプロジェクト2020のプログラムを転載する。



海と陸の結婚

2020.10.25 Sun

旧文洋小学校 + 東後畑棚田
(長門市油谷)

経理：安倍昭恵 水谷由美子 山口県立大学企画デザイン研究室
主催：やまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会
助成：公益財団法人東芝国際交流財団 山口県立大学 岡崎富夢
後援：長門市
協力：NPO法人 ゆや棚田景観保存会 株式会社tys ビジョン サロン・ド・エミール
東亜大学 芸術学部 トータルビューティ学科 合資会社ロオリング 有限会社ナルナセバ
株式会社 Archis 株式会社エムロード / FUSEGU (フセグ) 株式会社百姓庵
山口県立大学メディアデザイン・プロダクトデザイン・服飾デザイン・
グラフィックデザイン各研究室

BLUE & GREEN ART PROJECT 2020

オンライン配信「シンポジウム&ファッションプレゼンテーション」

ご挨拶

安倍 昭恵 来賓（前内閣総理大臣安倍晋三夫人）



現在、思いもよらなかった新型コロナウイルスによって価値観の変化は加速度を増しています。そして多くの人は自宅からほとんど出かけられない生活を強いられる中で、自分にとって本当に大切な物やこと、真の幸せについて何かしら考えたはずです。働き方が変わり、自然に囲まれた地方での生活に憧れる人も増えました。自然がいかに大切なものであるか、自然から学ぶことがいかに多いか、気付く人も多くなりました。

しかし私には今、地球の悲鳴が聞こえるような気がしています。人間の身勝手によりこれ以上地球を痛めつけてはいけません。このかけがえのない地球という星は人間だけの物ではありません。地球を守り続けていくために意識を変えることができるのか。私達は今そんな正念場に立たされているのではないのでしょうか。

美しい豊かな自然に囲まれたこの油谷から、これから私達が取り組んでいかなくてはならないことを考え、発信していくことができたら嬉しく思います。

この企画を開催するにあたりご尽力いただいた全ての皆様、遠くからお越しいただいたゲストの皆様、心から感謝申し上げます。

前川 剛志 やまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会 理事長（山口県立大学理事長）



当実行委員会は2016年から国際文化交流を通じて、地域文化・産業の活性化と海外ゲストによる日本文化の理解/発信活動をしております。特にファッションデザイン部門では、フィンランド、フランス、中国、韓国、およびハワイからゲストを招聘して、山口県立大学の教員・学生とともに、県内各地でワークショップを開催して参りました。

本年は国内外におけるCOVID-19感染症の拡大により、オンラインによるフィンランドのラップランド大学との創造的交流に限定致しました。本フォーラムではサステナブル服飾デザインに関するワークショップを実施するために、多くの作品を制作しました。また、IT時代に相応しい、バーチャルデザインによる発表も行います。

シンポジウム部門では安倍昭恵氏（前内閣総理大臣安倍晋三氏夫人）をはじめ、全国から多くのパネラーをお招きしています。里海と里山に関する、地域課題の解決に向けた議論が展開されますのでご期待ください。

最後に、この場をお借りして、公益財団法人東芝国際交流財団をはじめ、ご支援、ご協力をいただきました皆様、ご参加下さった皆様に心からお礼を申し上げます。

白井 純 公益財団法人 東芝国際交流財団 顧問



やまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会の皆様。この度は想定外のコロナ禍の中、様々なご努力の結果、シンポジウムを開催されますことを心よりお喜び申し上げます。本来であれば直接参加させて頂きたいところですが、東京からの出張は控えて頂き書面及びデジタル環境での参加とさせていただきます。

長年、フィンランド他の海外研究者と共同で、サステナブルデザインをキーワードとして研究創作を実施してきた皆様、本年からSDGsの主要テーマに注目し「海と陸の結婚」という提案活動を開始されたことに、心から敬意をお伝えします。自然との共存は日本固有の価値観であり、長門市油谷の海と陸をつなぎながら、山口の自然の恵みと豊かな文化を世界の未来に役立つ取り組みを、今後も継続的に推進されることを大いに期待致します。

皆様の益々のご活躍をお祈りいたします。

水谷 由美子 やまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員長



長門市油谷の日本海側に面した東後畑の棚田から海を眺めると美しい海が広がっている。黄昏の頃は漁火が点灯され、訪れる人々を幻想的な世界へと誘う。半島全体が棚田に覆われていた頃から比べると多くが原生林のような森に帰ってしまっている。それが、昨年棚田の一部がハーブ園として、今年からはコスモス畑として、徐々に再生されている。

油谷湾の西北に位置する油谷島では油谷湾の豊かな水で、四季折々の味を表現する塩が作られている。油谷湾を囲む陸の豊かな恵みが流れ込み、油谷湾の水はミネラルが豊富だ。

手入れされた陸が海の豊かさを生む。里山と里海はそれぞれ別々に発展が考えられてきた。これらを統合し、両者のつながりから地域の活性化を行っていくことの大切さに注目し、地域内外から広くゲストをお招きし、シンポジウムを開催します。

また、ファッションプレゼンテーションでは、フィンランドのラップランド大学との交流からサステナブルデザインとして作品を創造しました。ゲストデザイナー他による、サステナブルな素材での作品も発表されます。ファッションのフィールドから地域課題にどのようにチャレンジできるか。作品をご覧いただきご批評などを賜れば幸いです。

この場をお借りして、ご理解とご支援を頂いた皆様、参加下さったパネラーやデザイナーの皆様、スタッフやモデルの皆様から感謝申し上げます。

今回はオンライン配信で行われる。アーカイブとして、その後も同じ内容が見いただけるので、拡散もお願いします。

2

ワークショップ

1 「海を守る」ビーチクリーン

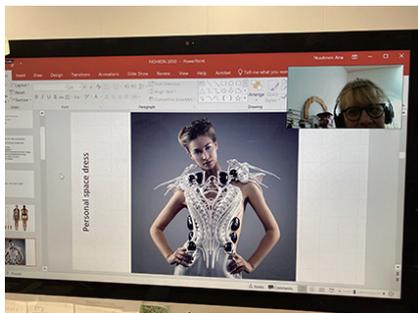
百姓庵 × 山口県立大学企画デザイン研究室



2020/9/15 台風後の油谷湾に漂着したプラスチックゴミのビーチクリーン

2 「海と陸を守る」国際交流から考える

ラップランド大学 × 山口県立大学企画デザイン研究室



2020/10/7 ラップランド大学 × 山口県立大学企画デザイン研究室 時差を超えたオンラインによる授業の共有と交流

3 プログラム

	13:00 棚田でのパフォーマンス
	14:30 開場（招待者のみ）
	14:50 オープニング・配信開始
	15:00 シンポジウム
	16:30 ファッションプレゼンテーション

ライブ配信 アーカイブ配信も同様



<https://www.youtube.com/channel/UCFrieduDWFrHQ3kliehs0g>

プロローグ 挨拶

前川 剛志 やまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会 理事長（山口県立大学理事長）

安倍 昭恵 来賓（前内閣総理大臣安倍晋三夫人）

シンポジウム（海と陸の結婚）

パネラー：畠山 重篤（NPO 法人森は海の恋人 理事長）

小橋 賢児（The Human Miracle 株式会社代表取締役 / クリエイティブディレクター）

井上 雄然（株式会社百姓庵 代表取締役）

坪内 知佳（株式会社 GHIBLI 代表取締役および船団丸代表）

コメンテータ：安倍昭恵

モデレータ：水谷由美子（山口県立大学国際文化学部部長・教授）

ファッションリサーチ&クリエイション

Ana Nuutinen（ラップランド大学芸術デザイン学部教授）

サステナブルファッションの紹介

天津 憂（クリエイティブディレクター）

安倍昭恵

ファッションプレゼンテーション（海と生きる 陸と生きる）

海と生きる	光の波 藤本めぐみ model: 郡さやか	ocean current 林子玲 model: 崎山陽和	Gritter 角谷優華 model: 榎本由里香
陸と生きる	memories 本田真悠 model: 斗光アカリ	Yrtit (ハーブ) 升田有紀 model: 池田真歩	Revive 矢吹穂衣 model: 津村実奈
レジャーウェア	Blessing of land 本田真悠 / 升田有紀 / 矢吹穂衣 / 山本成美 model: 山谷航平 / 小形里沙		
	Sea bubbles 田村奈美 model: 杉本瑛美維	波のゆらぎ 田村奈美 model: 原ゆうこ	
ワーキングウェア	Indigo Hermoso 角谷優華 / 藤本めぐみ / 林子玲 / 原田裕作 / 田村奈美 model: 浅井楓 / 郷原涼子		
	Verenkierto (循環) 山本成美 model: 稲葉皐	Saaret (島々) 山本成美 model: 河原好花	kukka seppele (草花のリース) 山本成美 model: 瀧谷奈々
mompekko	デザインディレクション: 水谷由美子 テキスタイルデザイン: 企画デザイン研究室		
+masukukko	服飾デザイン・モデリング: 山本成美 プロダクト: 合資会社ロォーリング masukukko 制作: 山本成美 / 田村奈美 masukukko 抗菌加工: 株式会社エムロード / FUSEGU(フセグ) model: 井上かみ / 和田あいこ / 松浦奈津子 / 水谷由美子		
sumokukko	デザイン: 水谷由美子 model: 水谷由美子	共同開発 model: 水谷由美子	モデリング: 下川まつる パターン素材: marimekko
海と陸の結婚	海と陸の結婚 デザイン: 水谷由美子 コ・クリエイト: 田村 未奈美 テキスタイルデザイン: 山本成美 model: 渡邊謙伸 / 吉松花梨		
フィナーレ			

4 プロフィール

パネラー

畠山 重篤 SHIGEATSU HATAKEYAMA



NPO 法人森は海の恋人 理事長
 京都大学フィールド科学教育研究センター
 1943年中国上海生まれ。県立気仙沼水産高等学校を卒業後、家業の牡蠣養殖業を継ぐ。海の環境を守るには海に注ぐ川、さらにその上流の森を守ることの大切さに気付き、漁師仲間と共に「牡蠣の森を慕う会」を結成（2009年、NPO 法人森は海の恋人を設立）。1989年より気仙沼湾に注ぐ大川上流部で、漁民による広葉樹の植林活動「森は海の恋人運動」を行っている。同時に、子どもたちを牡蠣養殖場へ招き、海の体験学習を続けている。東日本大震災で牡蠣養殖施設等の全てを失うが、震災直後より、震災後の自然環境を活かした地域づくりを展開している。

井上 雄然 YUZEN INOUE



1972年生まれ。大手企業などに務めるが脱サラ。経済と環境問題の狭間で生き方に疑問を感じ、楽しく生きられる最低条件は農・食・遊だと気づく。以来自然豊かな田舎に移り住み百姓になる。
 1997年 豊田町で田舎暮らしをはじめ「百姓庵」を主宰。
 2000年 オーストラリアに渡り、牧場の勉強のため8つの農場を回る。その後、アジア各国を回り、アジアの文化・農法・生活術に強く影響を受ける。
 2002年 油谷島に出会い移り住む。
 2004年 アジアンテイストの百姓民宿「百姓庵」を始める。
 2007年 塩の製造販売を始める。大規模清掃活動「ビーチクリーン大作戦」を始める。
 2008年 塩の話や生き方の話の依頼を受けるようになる。
 2017年 百姓庵を株式会社化
 2019年 Dining bar Zen オープン
 現在は過疎化が加速している向津具半島の活性化に向けて活動中。

小橋 賢児 KENJI KOHASHI



The Human Miracle 株式会社
 代表取締役 / クリエイティブディレクター
 1979年東京都生まれ。88年に俳優としてデビュー、数多くの人気ドラマに出演。2007年に芸能活動を休止後、「ULTRA JAPAN」のクリエイティブディレクターや『STAR ISLAND』の総合プロデューサーを歴任。500機のドローンを使用した夜空のスペクタクルショー「CONTACT」はJACE イベントアワードにて最優秀賞の経済産業大臣賞を受賞。キッズパーク PuChu! のプロデュースなど、イベントや都市開発の企画運営に携わる。

坪内 知佳 CHIKA TSUBOUCHI



株式会社 GHIBLI 代表取締役および船団丸代表
 2010年に知見のなかった漁業の世界に飛び込み、約60人の漁業者を主目萩大島船団丸代表に就任（現：株式会社 GHIBLI）。漁師集団とともに、漁協との調整や出荷ルートの確保、販路開拓までを手がけ、2015年より全国展開を開始し、山口、高知、鹿児島、北海道、千葉に船団丸ブランドを展開中。
 日本政策投資銀行（第4回女性企業家ビジネスプランコンテスト・地域未来賞） 日経 WOMAN（ウーマンオブザイヤー2014）、日経ビジネス 2017年「次代を創る100人」、Forbes Under 30、スイス銀行からも表彰され、日本の地方創生のため、勢力的な活動を続けている。
 著書：『荒くれ漁師をたばねる力』

ファッションクリエイター

天津 憂 YU AMATSU



衣装デザイナーを経て、単身 New York へ。アメリカ最大のコンベンション Gen Art で2年連続グランプリ受賞
 パターンメーカー、デザイナーとして務め、同時期にセレブの衣装を担当。帰国後、株式会社 212 を設立、レディース、メンズ共に展開。Mercedes-Benz Fashion Week TOKYO で DHC Award 受賞。2014年 Hanae Mori manuscript デザイナーに就任し、2016年に Hanae Mori のクリエイティブディレクターに就任。企業、イベントなどのユニフォームデザイン。2017年 MAF 展にて経済産業大臣賞受賞。2019年 G20 OSAKA SUMMIT にて総合演出として KABUKI を披露。ラグビーワールドカップ 2019 オープニングセレモニーにパフォーマーの衣装演出。

Ana Nuutinen



Ana Nuutinen, Ph.D. (Fashion) is a professor in the Faculty of Art and Design at the University of Lapland, Finland. She has a background in craft research at the University of Helsinki and in fashion design and research at the University of Art and Design Helsinki (nowadays Aalto University). Her design thinking is guided by futures research, artistic work and handicraft. The three intersecting viewpoints specify her design thinking to concept design, to explorative product development and to design of pioneer products.

スタッフ

安倍 昭恵 AKIE ABE

■企画・運営



聖心女子学院幼稚園から高等学校卒業。聖心女子専門学校英語科卒業。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科修了。株式会社電通新聞局を経て1987年安倍晋三氏と結婚。趣味は、ランニング、ゴルフ、お米づくり。2006年から山口県立大学企画デザイン研究室と共同開発を開始し、2013年からファッション創造による農業振興および地域活性化の活動を継続的に実施している。2018年から山口県立大学大学院国際文化学研究科非常勤講師。

水谷 由美子 YUMIKO MIZUTANI

■総合プロデュース・演出



山口県立大学国際文化学部長・教授
やまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員長。三重県生まれ。お茶の水女子大学大学院修了。ヘルシンキ芸術デザイン大学（現アールト大学）客員教授。山口の地域資源を活かし、服飾デザインを通して、地域のブランディングや商品開発について産学公連携による研究創作及びフィンランドのラップランド大学やハワイ大学マウイカレッジと共同研究を行う。また、サービスデザイン手法を取り入れ、サステナブルなデザインアプローチを行う。

田村 洋 HIROSHI TAMURA

■作曲



作曲家。山口県立大学名誉教授。
服を着ていない人間はいない。服飾文化が人類の歴史を華やかに彩っている。山口県立大学のファッションショーの音楽を初回から担当しています。音楽をファッションショーを彩る一部になれば幸いです。

企画デザイン研究室

■企画・運営・ファッションデザイン



角谷優華 / 藤本めぐみ / 本田真悠 / 升田有紀 / 矢吹穂衣 / 林于玲
(山口県立大学国際文化学部文化創造学科)

田村奈美 / 山本成美

(山口県立大学大学院国際文化学研究科)

5

商品開発

BEAT ICE × 東後畑の棚田米＝「油谷アイス」



この度、油谷の皆さまとの出会いにより、東後畑の棚田米を使用した「油谷アイス」が誕生したことをとても嬉しく思っています。棚田では「守る」や「保全」という言葉がよく使われるように、「棚田を守っていくには、続けていくにはどうしたらいいんだ？」という問題があります。私たちはその問題を、「棚田から笑顔を生むにはどうしたらいいんだ？」という「問い」に変換してみました。その「笑顔」「喜び」の連鎖が、結果として続くことに繋がるのでは、と考え、日本各地の「棚田アイス」を作っています。今回、新たに誕生した「油谷アイス」が、人と人、東後畑の棚田とあなたとの繋がりをつくる新たなきっかけになれば嬉しいです。

Naru Naxeve × 山口県立大学企画デザイン研究室＝mompekkko+sumokukko+masukukko



Naru Naxeve



〒753-0093 山口市大殿大路 246
TEL: 083-934-5566 (代表取締役 下川まつ丞)
Mail: narunaxeve@gmail.com
Instagram: @narunaxeve
mompekkko オンラインストア: <http://mompekkko.com>

有限会社ナルナセバは、山口県立大学大学院生のインキュベート機能を目指したベンチャー企業として、服飾デザインに関わる商品開発、制作、販売などを行なっています。2014年からは山口県立大学企画デザイン研究室とのコラボレーションにより、おしゃれに着られる農作業着をコンセプトにした「モンベッコ」の商品開発、販売をしています。今年は、軽作業着用として上記研究室と共同でスモクッコ sumokukko を新しく開発しました。その他、衣装のデザイン・制作や洋服オーダー、地域の物販イベントへの出展なども積極的に行なっています。

新作 mompekkko 紹介: **mompekkko earth 2020**
今年の mompekkko は大自然とのクリエイションをコンセプトにしています。共通の経系では、長門の棚田や陽と海の響き合いを表現しています。

色展開
藍: sea 茶: land 緑: forest 朱: sun 白: light
チーフテキスタイルデザイナー: 山本成美

株式会社エムロード / FUSEGU(フセグ) × 山口県立大学企画デザイン研究室＝高性能マスク masukukko



〒721-0973 広島県福山市南蔵王町 3-6-39 Tel: 084-928-5666 <https://fusegu.jp>

高機能な子供服ブランド【FUSEGU(フセグ)】(@fusegu_kinou)は、着るだけで服に付着したウイルス・菌・汚れ・匂いなどの有害物質を分解・増殖抑制する事が可能になったブランドです。汚れが落ちやすい防汚効果や消臭効果・花粉脱落効果・静電気防止効果などママや子供に嬉しい高機能がたくさん。室内干しの嫌な匂いを抑えたり、防汚効果で洗濯も楽々。

【FUSEGU(フセグ)】に使用しているハイブリット触媒加工は、国立大学法人大阪大学との共同研究開発により生まれました。

洗濯しても効果が長続きし 24時間 365日働いてくれます。言わば漢方的な働きで副作用がありません。

勿論、安全試験にもクリアしており、安心安全な加工技術で日本アトピー協会からも推奨を受けています。

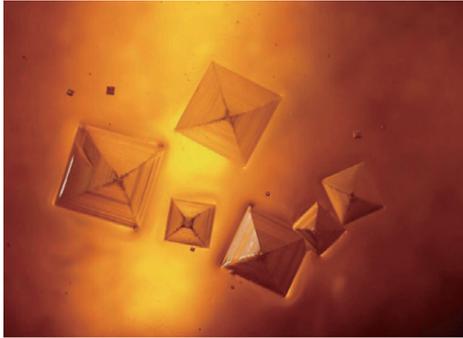
(注意) 病気の治療や予防を目的とするものではありません。

協力: 石津和也 (MaG 合同展示会主催・Web プロモーション代表)

6

海のめぐみ 陸のめぐみ

株式会社 百姓庵



『百姓の塩』は、原生林が50%以上残る、豊かな森を持つ汽水域の海水を汲み上げ、天地返しという手法で製造しています。

春には春の野山があるように、海もまた四季を彩ります。

百姓の塩は、世界でも珍しい、塩に四季のあるのが特長です。

四季折々の食材に合わせて、四季の塩をお楽しみください。

NPO 法人 ゆや棚田景観保存会の活動と商品開発



NPO 法人 ゆや棚田景観保存会は 2019 年に長門市で第 25 回全国棚田（千枚田）サミットが行なわれたことをきっかけとして、耕作放棄地の雑木林化した棚田を開墾し、ハーブを植えた。かつて長門市向津具半島全体が棚田で覆われていた。年々増加する放棄地について、新しい活用法によって棚田を維持できないかと考えた結果である。ハーブは農薬や肥料は一切使用せずに圃場の自然環境に適応した品種を選び、栽培している。

今年はハーブ園とともに新しく開墾した棚田をコスモス畑にして、この地を観光のデスティネーションにする活動をしている。

こうした取組みを通じて、棚田の活性化事業が次ぎの担い手を育成することに繋がると考えている。

棚田で育ったハーブの活用として、西村一彦と和田あいこそして当景観保存会の間で、ジンの商品開発の話が持ち上がった。そして西村氏によってゆやの棚田園の「青舞（オーブ）」が誕生された。

現在は祭日を含む週末には 300 名前後の来客数がある棚田となった。そして、ハーブを使った美容液とも言われるスカイソーダを開発し販売をしている。また、ジェラートのトッピングとしてもハーブが使われている。これらの売上の一部を棚田の維持や開発などに使用している。

後畑地区の棚田の再生と油谷産の GIN「青舞」

GIN は、そのまま食べても美味しくないハーブの薬効成分を抽出する溶剤としてアルコールを利用した酒です。青舞は、棚田のハーブ 9 種類、ミント、レモンバーベナ、ラベンダー、レモングラス、タイム、ローリエ、セイジ、ローズマリー、ローズゼラニウムを主に使い、時期に応じた季節のハーブを使っています。これに輸入のジュネバーベリーとコリアンダーシードと国内産の無農薬栽培の蕃薺と天草を使っています。これらの成分は、抗酸化作用や女性ホルモンの活性に抗体への作用、精神の沈静化等に作用する傾向にあります。また、原材料はエタノール純度 99.99% を使い、肝臓でのホルムアルデヒドの生成を抑え、二日酔いや頭痛やアルコール中毒症等の神経に作用する成分を限りなく抑えています。

GIN「青舞」は無農薬栽培をしたハーブを可能な限り嗜好品化を図り、世界に油谷を発信しています。

7 スタッフ

・総合プロデュース・演出

水谷 由美子

・企画・運営・コメンテーター

安倍 昭恵

・服飾デザイン

水谷 由美子

田村 未奈美（学校法人山口中村学園 中村女子高等学校教諭）

下川まつゑ（有限会社ナルナセバ代表取締役 チーフデザイナー）

角谷優華 / 藤本めぐみ / 本田真悠 / 升田有紀 / 矢吹穂衣 / 林于玲

田村奈美 / 山本成美（山口県立大学企画デザイン研究室）

・ヘアメイク

西脇未美（山口国際美容文化研究所 サロン・ド・エミール）

海井美紀 / 小川道加（東亜大学 芸術学部 トータルビューティ学科教員）

中島 董 / 鈴木祐実歌 / 内田かの / 太田萌香 / 岡美月 / 清本純菜 / 小林友希乃

杉本有美 / 波賀彩華（東亜大学 芸術学部 トータルビューティ学科）

・写真撮影

鴨瀬克己（鴨瀬写真事務所）

・映像・配信

笹尾友信 / 岡村芳洋 / 廣畑絢子 / 数村俊哉 / 高松博由樹 / 山本立哉 / 岡田義之

（株式会社 tys ビジョン）

・演出補佐

矢吹穂衣 / 林于玲 / 本田真悠 / 升田有紀

・配信補佐

藤本雅史

・MC

田村美憂（山口県立大学エトワール放送局）

・学生リーダー

角谷優華 / 升田有紀

・グラフィックデザイン

藤本めぐみ

・運営スタッフ

角谷優華 / 藤本めぐみ / 本田真悠 / 升田有紀 / 矢吹穂衣 / 林于玲

田村奈美 / 山本成美

・スタッフ

田村美憂 / 山本直美 / 六反田麻衣 / 井村綾香

大石綾香 / 石田彩夏 / 甲斐雄大 / 野村啓人 / 向井舞衣

主催：やまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会

助成：公益財団法人東芝国際交流財団 山口県立大学 岡崎富夢

後援：長門市

協力：NPO 法人 ゆや棚田景観保存会 株式会社 tys ビジョン

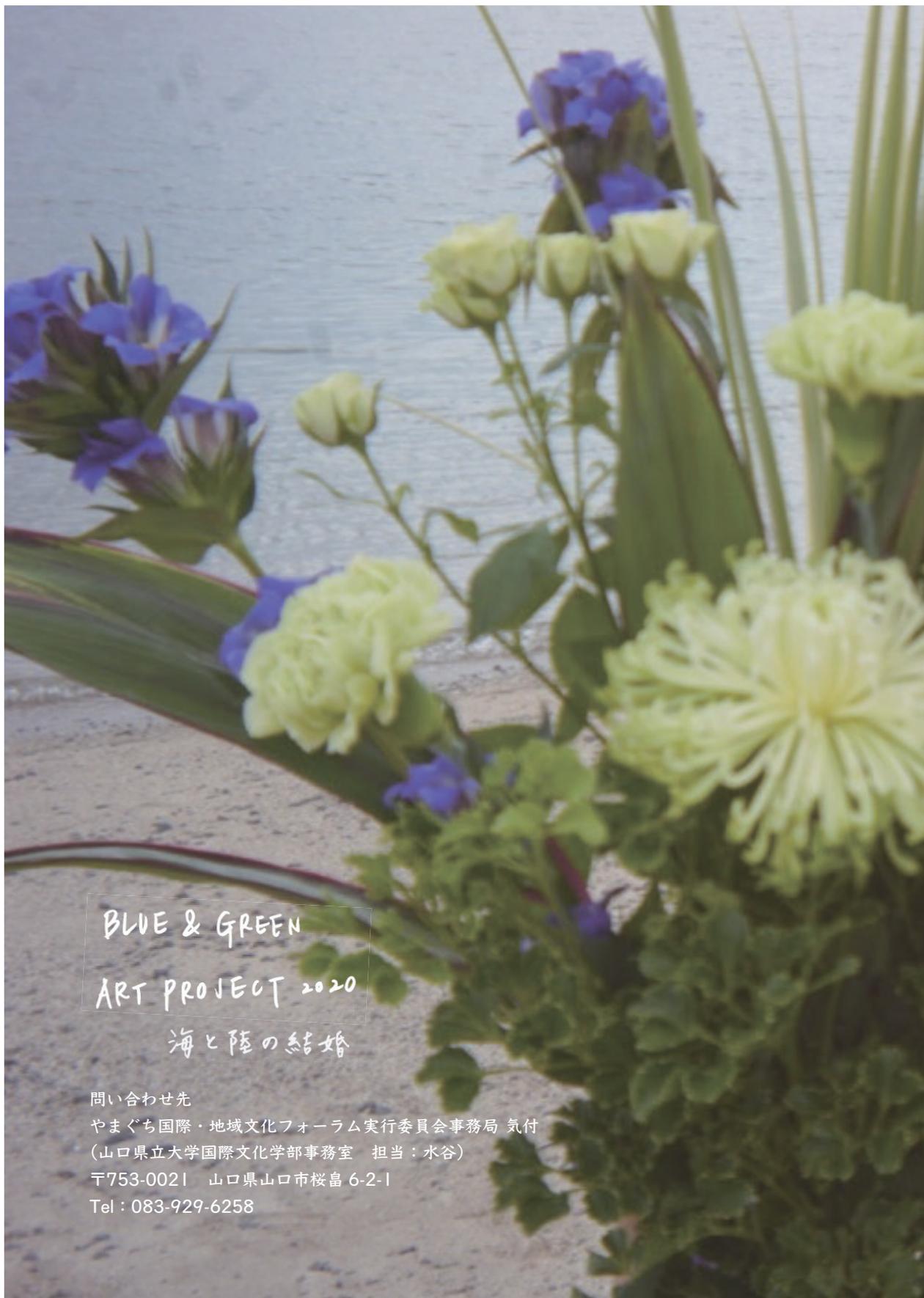
サロン・ド・エミール 東亜大学 芸術学部 トータルビューティ学科

合資会社ロォーリング 有限会社ナルナセバ 株式会社 Archis

株式会社エムロード / FUSEGU（フセグ）株式会社百姓庵

山口県立大学メディアデザイン・プロダクトデザイン・服飾デザイン・

グラフィックデザイン各研究室



BLUE & GREEN
ART PROJECT 2020

海と陸の結婚

問い合わせ先
やまぐち国際・地域文化フォーラム実行委員会事務局 気付
(山口県立大学国際文化学部事務室 担当：水谷)
〒753-0021 山口県山口市桜島 6-2-1
Tel : 083-929-6258